

2月23日の星川の講演（発表）に参加される皆様へ

当日は、発表（講演）を聴いていただくだけでは理解しにくい部分もあるうと思いますので、2校を終えた「論文¹を読み上げる」という形になります。

発表に先立ち、論文の(1)タイトル、(2)論文の構成、(3)「はじめに」と「おわりに」をお知らせします。

「はじめに」でも明言しているように、発表者は「ヘブライ語にも聖書学にもユダヤ＝キリスト教の神学にも精通している」わけではありません。しかし、重要な問題——宗教言語における名詞の「指示/指示作用/指示行為」をめぐる問題、宗教伝統の引き継ぎをめぐる問題——を示唆しているという自負はあるので、発表をもとに活発な質疑応答がなされることを期待しています。すなわち、本発表（素描的考察）が多くの議論・考察を誘発することを願っています。

(1)タイトル：

S・クリプキの「指示の因果論」とユダヤ＝キリスト教の「神」をめぐる素描的考察

(2)論文の構成：

はじめに

1. S・クリプキの『名指しと必然性』における「指示」の理論

1. 1 クリプキの問題提起

1. 2 「指示」について

1. 3 「記述的指示理論」の誤り

1. 4 最初の命名儀式

1. 5 指示の連鎖

2. ユダヤ＝キリスト教における「神」

2. 1 旧約聖書（ヘブライ語聖書）における「ヤハウェ」「神」「主」

2. 2 新約聖書における「ヤハウェ」「神」「主」「イエス」

2. 3 神の属性・性質の問題

2. 4 「三位一体」論

3. クリプキの指示理論のユダヤ＝キリスト教への応用

3. 1 「神」という語の指示対象と指示の連鎖

3. 2 神の属性・性質および三位一体の問題

3. 3 無神論への対応

3. 3. 1 種々の無神論

3. 3. 2 キリスト教における「惡」の問題

おわりに

(2) 「はじめに」と「おわりに」:

「はじめに」

筆者は言語分析の立場にたつ宗教学者である。その立場から、筆者は、(1)人間である限り言語を使用して物事を考えている、(2)「神」という語があるからこそ神を信じることができる、(3)言語がなければ宗教は存続しえない、(4)学問的議論では言語化できないものはその対象にはなりえない、と考えている。

それゆえ、筆者の立場に対してユダヤ＝キリスト教の神学的立場から提出されると想定される批判——たとえば「神」について言語で語り尽すことは不可能である——を念頭におきつつも、本論文では、次のことを目的とする。すなわち、その目的とは、(1)クリプキ（1940–2020）の『名指しと必然性』にある「指示」をめぐる議論を本論文との関わりのもとで要約し、(2)それをユダヤ＝キリスト教の「神」に応用することによって、(3)ユダヤ＝キリスト教にかかる3つの重要な問題（「神」という語の指示、「神」の属性・性質と三位一体、無神論への対応を、めぐる問題）を新たな視点から考え方直すこと、である。

本論文はかなり風変わりな理論的論文なので、一言だけ述べておきたい。筆者は、ヘブライ語にも聖書学にもユダヤ＝キリスト教の神学にも精通しているわけではない。それゆえ、文献学的な事柄を批判されても仕方がない。この論文にいくばくかの価値があるとすれば、それは通常の論文とは異なる「横断的発想」で展開される第3節での議論そのものである。

「おわりに」

クリプキの知見に基づいて展開した、本論文の議論の結論を要約／再提示すると、次のようになる。(1)ユダヤ＝キリスト教は数千年の歴史をもつが、「神」という語は、「最初の指示意図の引き継ぎ」がある限り、その宗教共同体のなかで「同一の対象」を指示している、といえる。(2)神の属性・性質については多種多様な見解があるが、それらの記述的見解の相違はユダヤ＝キリスト教の神の存在にとっては副次的なものであり、それらの間の対立や矛盾は許容されうる。また、ユダヤ教徒はキリスト教の「三位一体」の教義を認めないが、「最初の指示意図の引き継ぎ」がある限り、2つの宗教の信者が異なる神を信じていることにはならない。ただし、ユダヤ教徒がキリスト教徒の「最初の指示意図の引継ぎ」を容認しない場合は、この限りではない。(3)「無神論」という（ユダヤ＝）キリスト教にとって由々しき主張がある。しかし、キリスト教徒（とりわけキリスト教神学者）は、神の属性・性質について述べる複数の記述的命題間の不整合性／それらと現実世界との不整合性を根拠に神の存在を否定する「合理的無神論」を、退けることができる。

¹ 『大正大學研究紀要』第110輯（2025年3月末刊行予定）に掲載。他の執筆者との関係で、頁は大幅に動くので、興味をもたれた参加者は、そちらをご覧ください。